

4 CPUと出力機

私には脳性麻痺と言語障害がある。その私の障害観を、コンピューターを例に明らかにしたい。

「入力機」は時代と共に改善されてきている。障害者総合支援法を利用して、読書の時はヘルパーさんに本を固定してもらい、ページめくりをお願いしている。毎週6時間。ヘルパーさんが来てくれる時間が、私の固定した読書時間だ。充実してきた電子書籍もありがたい。

テレビも多チャンネルになっている。放送大学、ヒストリー、ネオジオ、アニマルチャンネルの録画番組を、毎日布団の中から見るのが楽しみだ。

CPU（中央処理装置）である認識、思考、記憶に不自由や制限は感じない。

問題は「出力機」だ。かなりのバリアー（障壁）とストレスを感じる。

一対一の対話だと良いのだが、多人数になると会話に入っていけない。話したいと思っても言葉が口先に来た頃には、もう話題は変わっている。話の流れを中断させるのが怖くて言葉を飲み込む。相手が私の言葉を聞き取るのは大変だと感じると、こちらから無口になる。

コンピューターは、出力機が正常に機能してこそ、入力機やCPUのことが判断できる。CPUが機能しているても、出力機が故障していれば、CPUもそのように見られる。私たち脳性麻痺者は、外見だけで判断されることか多いように思う。偏見や差別を感じる。

障害とコンピューターを関連づ

けるようになったのは、昨年（2016年）、相模原市で起きた障害者殺傷事件に思いを巡らす中である。動きが見られない出力機が、そのままCPUに思えてしまったのだろう。「見かけで判断しないで」と声を大にした。

先日、地域福祉の講演会に行ってきた。会場正面のスクリーンに映し出されているはずのパワーポイントの表示がほとんどみえない。スクリーンの上部の電灯を消すと、表示がはっきりと浮かび上がった。印象的な場面として心に残った。

常に心の窓ふきをしながら、人生を生きていきたい。

